

第2回塩竈市総合教育会議 概要報告

1 日時 平成29年2月10日(金)
開会 16時10分 閉会 17時20分

2 会場 壺番館3階 共用会議室

3 出席者 塩竈市長 佐藤 昭
塩竈市教育委員会
教育長 高橋 睦麿
教育長職務代理者 柴田 仁市郎
委員 太田 忍
委員 池野 暢子
委員 山田 達磨

わくわく遊び隊運営委員会
代表 藤崎 雅久

(事務局)

政策課長 相澤 和広
子育て支援課長 木村 雅之
教育部長 菅原 靖彦
教育部教育総務課長 渡辺 常幸
教育部学校教育課長 遠山 勝治
教育部市民交流センター館長 伊東 英二
教育部教育総務課総務係長 菊池 亮
教育部教育総務課総務係主事 工藤 貴裕

4 協議事項 議題1 小中一貫教育推進事業について
議題2 『わくわく遊び隊』の実施状況について
議題3 塩竈アフタースクール事業について

5 概要

- 開会
- 佐藤市長あいさつ
- 出席者紹介
- 協議事項

議題1 小中一貫教育推進事業について(事務局説明)

来年度から本格実施の小中一貫教育推進事業について、取組方針などについて資料に基づき説明後、意見交換を行った。

【主な意見】

- 〈池野委員〉 「アプローチカリキュラム」、「スタートカリキュラム」とはどういう内容か。
- 〈遠山学校教育課長〉 両方とも目的は一緒で、小学校に入学した際に、例えば、黙って座って話を聞くことができるといったことなどのルールをつくり、そのルールに沿って幼稚園、保育所から小学校へと円滑に接続できるようにするための指導計画である。幼稚園、保育所での生活の中でも取り入れてもらいたいと考えている。さらに、小学校の先生が保育所等に様子を見に行くなどの交流も考えている。今回、幼保小連携の目玉として、特別支援教育の専門の方をスーパーバイザーとして雇用し、市内の幼稚園、保育所を巡回しながら、発達障害を抱えている子どもたちに、保育所の先生たちがどう接するかといったアドバイスをしたり、保護者の相談にのったりする取り組みも行いたいと考えている。
- 〈柴田委員〉 浦戸小中学校の成功は施設一体型であることが大きいと感じる。施設分離型で実施する場合には、交流をいかに密に行うことができるかが大事で、浦戸のような密度の濃い交流の場を設けることを考えてほしい。
- 〈佐藤市長〉 積極的に交流の場をつくっていかないと、小中が別の施設分離型であることからその辺の取り組みはしっかりしないといけない。あくまでも今回示した資料は理念的なものを取りまとめたわけで、今後は具体の取り組みをこの総合教育会議の場で示し議論していきたい。
- 〈柴田委員〉 将来的には一体型の小中一貫教育もあり得るのか。
- 〈佐藤市長〉 ちょうど、昨日、市の管理している公共施設が年間どれくらいのコストがかかっているのか、今後施設をどのようにしていくのか、将来どのくらいのランニングコストがかかるのかといったことを決める公共施設総合管理計画の中間報告を受けたところである。市の施設を考えた場合、今後は学校に限らず、施設の統合、複合化は避けて通れないと思う。今後学校をどうするのか、どれくらいのコストがかかるのかといったことを市民の皆さんに説明していく義務がある。
- 〈太田委員〉 これまでの総合教育会議の中で、不登校問題や中一ギャップの解消をとということで、小中一貫へという話になってきたと思うが、実際に中学の先生が小学校に来て、中学校のことを話されたり、中学生が小学校へ出向いて小学生と交流したりする中で、小学生が中学に対して不安を感じなくなっているという話を聞いて、とてもいいことだと思う。浦戸のように施設が一緒でというのが本当はよいが、財政的にも厳しいわけで施設分離型も仕方がない。資料に書かれてある「社会をたくましく生き抜く力」をすべての子どもたちに身に付けさせる、当たり前のことをきちっと教えること、そのためには、小中一貫、交流、活躍は必要なことではないか。
- 〈山田委員〉 ぜひ、先生たちの交流を進めてほしい。小学校と中学校では全然ちがうことを先生たちがお互いに分かりあう。そして、年齢にあった学びの目標を明確にし、緊密に力を合わせることで、目標達成を目指してほしい。子どもたちに、活躍する場、交流する場を与えて、成功を体験させることで自尊感情を高めることは、本当に大切なことである。このことは、学校の先生だけでできることではなくて、親、地域社会みんなでき取り組むべき。
- 〈高橋教育長〉 今回の小中一貫教育では、交流と活躍がキーワードとなっている。浦戸の例を挙げるが、代表的なことと言えば、演劇活動など児童生徒一人ひとりに活躍の場があり、ま

た、地域の皆さんとの様々な交流により、子どもたちが生き生きと学校生活を過ごしている。小中一貫では、まずは、少しでも分かる、そして、授業で活躍できる授業改善を行うことはもちろん、学校生活に様々な交流を取り入れ、さらに、保護者や地域の皆さんとの交流の場を設けるなどたくさんの仕掛けをつくっていききたい。

〈柴田委員〉 地域の方を巻き込んだ交流の場をつくる必要がある。また、一人ひとりの個性を認めてあげること、先生たちにはその辺りを意識して、9年間取り組むべきである。

〈佐藤市長〉 平成29年度に本格実施する事業である。教師用、市民用、PTA・保護者向けの資料やパンフレットにおいて、しっかり周知することを教育委員会にはお願いしたい。

議題2 『わくわく遊び隊』の実施状況について

議題3 塩竈アフタースクール事業について

議題2について、わくわく遊び隊運営委員会の藤崎雅久代表から事業の実施状況を説明、議題3について、子育て支援課の木村雅之課長から塩竈アフタースクール事業の説明後、意見交換を行った。

【主な意見】

〈柴田委員〉 地域で子どもを見守る素晴らしい事業である。ただ、指導者の確保など、ご苦勞なことが多かったのではないかと。また、指導者の質というか、人によって対応がちがうと子どもも戸惑うと思う。活動報告の中で、ボランティアで関わってくれる方が出てきたと言った話があった。とてもうれしいことだが、なにかあった場合、こちらから強く言えないこともあるのではないかと。

〈藤崎代表〉 指導者への意識づけとして、中学校の部活では、外部指導者制度を取り入れて、ガイドラインをつくり、それを基本に部活動の指導をしている。わくわく遊び隊でも、指導のガイドライン的なものを作成し対応していきたくて考えている。大事なものは、PTAを通じて地域の人たちが指導者ではなくても、見守り隊として、一緒にいてくれるだけで、親たちも安心して預けられる。その辺りも掘り起していきたくて。

〈池野委員〉 わくわく遊び隊の募集は市内全域にかけたのですか。

〈太田委員〉 モデル地区ということで、玉小で一年間やってみた。これを拡大していきたくて考えている。

〈佐藤市長〉 実はそういう思いでアフタースクール事業の予算を国へお願いした。塩竈の学校教育と地域活動が一体となって展開できるものを目指したいと考えている。予算も3年間で5,000万円となり、小中一貫教育に匹敵する予算を確保した。相乗効果を期待している。放課後児童クラブに通う子どもたちからも参加したいという声が上がると考えている。

〈藤崎代表〉 実際に、放課後児童クラブの子どもたちの多くが、わくわく遊び隊へ参加している状況がある。

〈佐藤市長〉 活発な交流を目指したいと考えている。こういった形で連携できるか、相互に交流できればよい。

〈柴田委員〉 アフタースクール事業は31年度から指定管理者制とかそういうものを想定しているのか。

〈木村子育て支援課長〉 30年度までに自立できる事業を目指したいと考えている。

〈佐藤市長〉 今回のような事業を提案したのでは、全国で塩竈だけであった。30年度までにしっかり成果を示して、こういうことをすると地域にこういう成果が出るという先進事例として国に示し、新たな支援制度を創設してもらおうように国へ働きかけていくことが大切であると考えている。